

被服イメージにおける類型化について

梅花短大○家本 修 鳴門教育大 広瀬 月江 大科教セ 西沢 悦子

目的：被服の機能機能には、保健的機能と社会的機能が主要な機能と考えられるが、社会的側面の教育が少ないのが現状である。ところが社会での情報の過多や家庭での伝達機能の低下など、一般的に青少年の被服の着用時での戸惑いや自信の無さ、社会規範との不一致感などが見られる。そこで、中・高校生がこの社会的機能面に於いて、いかに被服のイメージを把握しているか、把握できるかを授業実践を通して実験調査を行い検討した。本報では、中学生の被服のイメージ調査より、中学生が同年代で主として着用するであろう被服のイメージをどのように把握し類型化しているかについて検討したので報告する。

方法：被服1の指導の領域で授業実践を行った。昭和63年1～2月に実施。対象は、大阪府八尾市立T中学校の第1学年男子80名・女子66名。手順は、事前調査、授業実践、事後調査・感想文の順に実施した。授業中のイメージ調査は、中学生の意見から着用する可能性のある6サンプル（男子の写真3枚、女子の写真3枚）の写真パネルを作成し提示後、各人でSD法により評価を行い、グループやクラス単位でプロフィールを検討討論した。分析には、因子分析、分散分析、T検定、数量化Ⅱ類、クラスター分析などを使用した。

結果：①全体イメージ3因子は、「A：デザイン性の因子」（寄与率：54.7%）「B：内面性の因子」「C：装飾性の因子」で、各パネルの因子スコアの値に有意差（ $P<0.01$ ）。②A因子で（ラフ、派手）と評価したパネルの強イメージ群と弱群間で「ファッションの関心度」や「学習意欲」等に有意差（ $P<0.05$ ）。③同強イメージ群の「流行の関心度」は授業前より低下、逆に「学習意欲」は向上する。よって高い学習性があると考えられる。